

2024年5月31日

文化教養学科

桐生 直代

## ティーチング・ポートフォリオ 2023年度の科目担当一覧表

### 1. 教育の責任

2023年度の担当科目一覧表

科目区分 (教養／専門／教職)	科目名	種別 (必修／選択)	開講時期	受講者数
教養	実用書道	選択	後期	15名
専門	近代文学を読む1	必修	後期	37名
専門	近代文学を読む2	選択	後期	39名
専門	日本語日本文学入門	選択	前期	12名
専門	日本語日本文学演習	選択	前期	8名
専門	卒業研究1	必修	前期	8名
専門	卒業研究2	必修	後期	8名
専門	書道1	必修	前期	41名
専門	書道2	選択	後期	7名
専門	プレゼミナール1	必修	前期	8名
専門	プレゼミナール2	必修	後期	6名
教職	国語科教育法	選択	後期	7名
教職	教育実習事前・事後指導	選択	前期/後期	3名
教職	教職実践演習	選択	後期	14名

\*科目区分：「教養」、「専門」、「教職」の3つから指定すること。

\*種別：「必修」、「選択」の2つから指定すること。なお、選択必修は「選択」とする。

### 2. 教育の理念

たとえば、日本の文学を生み出した作家や時代、風土等を学ぶことは、広い視野と専門性にたって日本を学ぶことであり、そこから自分自身のあり方について考えることでもある。知識を得、問題意識を持ち、思索し、自らの考えを表現する力こそがその人の教養となる。その基盤となるのがことばの力であり、それを日本の文学や日本の文化を通して修得し、社会で生きていくために必要な能力や品格を身につけさせることを教育のねらいとしている。

また、高等教育にふさわしい学力を育成するため、文学の授業では論理的な思考の育成を、書道の授業では技能の習得を、教職の授業では実際的な学習活動を軸に置いている。専門性のある学びをとおして、主体性と自立性を育成することを目的としている。

### 3. 教育の方法

講義科目の文学系の授業、演習科目の「卒業研究」、実技科目の書道の授業を取り上げ、理論と実技の教育方法を述べる。

- 「近代文学を読む1」「近代文学を読む2」：「近代文学を読む1」「近代文学を読む2」は文学史を軸とした日本近現代文学の基本的な知識の習得と主体的に読む力の育成を目標に、毎回、教員が作成したプリントを使って行った。どの科目においても文学作品の読

解を必ず入れ、学生が、それぞれの作家が持つ文学的特徴を読み取ることができるようとした。その際、教員の説明だけでなく、学生同士のディスカッションを取り入れた。個人での解釈、他者との意見交流、教員の説明（方法の習得）、そして個人での熟考（まとめと授業の振り返り・レポート）という一連の学びを通して思考力と表現力を養うようにした。

- 「卒業研究 1」「卒業研究 2」

卒業研究にて、「プロジェクト研究—太宰府文学マップ作成—」を立ち上げた。参加学生は 4 名。学生が主体的に取り組み、地域文化へ貢献できるプロジェクトになるよう指導・支援した。2023 年度は都府楼址、太宰府天満宮を中心に、夏目漱石、森鷗外、吉井勇らの足跡を Google マップで表示するところまで完成させた。

現地調査には教員も付き添って助言を行った。学生の記述には、FWJConLine やアクティブメールをとおしてフィードバックを行った。作家や作品を理解する手段として iPad を使い、文学館や各種データベースの検索方法を指導した。

- 「実用書道」「書道 1」「書道 2」：何れも理論（書道史・書写教育含む）と実技を組み合わせた授業とし、実技においては絶対評価を行った。そのための材料として、毎回の授業のねらいに基づき、学生自身が実技においてどれくらい上達したかを把握する「振り返りシート」を作成して用いた。「書道 2」においては、「振り返りシート」と作品（清書）をファイリングした作品集を作成した。「実用書道」においては、受講生が 3 学科にわたったことからボールペンと筆ペンを用いて履歴書やお礼の手紙、のし袋などを整った文字で書く授業を行った。何れの授業でも学生が書いたものについては全て朱書きで添削し、実技の向上につながるようにした。

#### 4. 教育の効果

- 文学系の授業では、iPad 等を使い、自分で調べることで知識と理解を深めることができたと思われる。さらに、学生同士のディスカッションを積極的に取り入れたことから、表現力を養うことができたと思われる（根拠資料：学生アンケート、リアクションペーパー）。
- 「プロジェクト研究—太宰府文学マップ作成—」では、太宰府という地の利を活かした学びと、地域の一員として文学の役割を考え、学生が自ら学んだことを他者のために役立てる機会を与えることができた。また、Web コンテンツの作成は、情報系のゼミ（牧幸浩ゼミ）と協働で行ったが、この横断的な学びにより、社会で求められる情報活用能力の育成に繋げることができた。（根拠資料：卒業論文、「太宰府文学マップ」  
<https://ceylon.fukuoka-wjc.ac.jp/bunka/literacymap/>）

- 「実用書道」「書道 1」「書道 2」：学生の作品と振り返りからは、書道に対する関心と理解が深まったことが見て取れた（根拠資料：学生の作品・振り返りシート）。また、作品をお互いに見せ合ったり、本学のインスタグラムに載せてもらったりすることでモチベーションや達成感を味わわせることもできた。「実用書道」については、実際に履歴書や手紙、のし袋を書くことで就職活動と関連付けることができた（根拠資料：授業資料、学生の作品）。

#### 5. 今後の目標

- 文学系の授業について：日本語日本文学の科目は、必修 5 科目、選択科目 2 科目と決して多いとはいえない。教職課程（中学校国語）を持ち、司書資格取得を目指す学生が多く

いという本学科の特色を踏まえれば、近現代文学に関する知識と理解は必須である。限られたなかでの授業内容の精選が課題である。ディスカッションによる口頭での表現力は育成されていると考えられることから、今後は作品の分析と評価を適切に表現する文章力を向上させることに努めたい。学生にとって魅力的な授業となるよう、教員の指導力・研究力を付けることを目標とする。

- 卒業研究について：2024年度も引き続き「太宰府文学マップ作成」に取り組む。文学作品等を増やし、より使いやすいマップにできるよう指導する。2023年度版は「仮」として外部に公開していないため、今年度は外部に公開する。
- 書道の授業について：各科目における教材は適切と思われるが、「書道1」については、学修内容の「仮名」を日本古典文学や日本語学とのつながりにおいて意識させるよう努めていきたい。また、「書道2」「実用書道」については、授業の学びが日常の文字に活かすことができるよう意識付けを行う。以上の書道科目の目標の達成の手立ての一つとして、自ら書いた文字（作品）を授業内外で発表・披露する機会を増やしていく。

## 6. 根拠資料

- シラバス
- 授業資料
- 授業評価アンケート結果
- 授業改善計画書
- その他
  - ・各科目のリアクションペーパー：非公開、評価後に学生へ返却。
  - ・「太宰府文学マップ」：<https://ceylon.fukuoka-wjc.ac.jp/bunka/literacymap/>  
2023年度版は「仮」として限定公開。
  - ・「実用書道」「書道1」「書道2」：学生の作品（作品は清書を2つ作成させ評価、その後1つを提出、もう1つは学生に返却）。「書道2」については、学生ごと1冊に綴じた「作品集」。学生の承認を得てオープンキャンパスなどで使用し、その後返却。「実用書道」ではテキストの練習と添削、履歴書、手紙、ハガキ、のし袋、年賀状などの作品。
  - ・FWJConLine 各科目のコース